

「好きを仕事にして、キラキラ輝いている女性がとてもううやましい。これは誰もが一度は思うことかもしれない。相談に訪れたHさんもその一人だった。」

「私もキラキラ輝いている女性になるために、何かやりたいんです！でも、その『何か』が分からなくて。そう興奮気味に話す二十九歳のHさん。二年前の出産を機に会社を辞め、今は専業主婦をしている。あわただしく過ぎる毎日に、なんとなく満足できずにいたとき、「起業した女性の話を聞きに行かない?」と友達に誘われた。「起業?」思ってもよめ誘いに戸惑ったが、久しぶりの外出なのでとりあえず行ってみることにした。そして、Hさんは出会ってしまったよっだ、そのキラキラしている女性に!!

それからは、寝ても覚めても「起業」の二文字が頭から離れない。自分の好きなことをやって、誰かに喜ばれ、自分の存在が認められる。さらにお金までもらえる「起業」は、現状になんとか満足できない自分にピッタリだと思ったとのこと。起業という目標を持つ

「好き」を仕事に…起業したい!

優先順位つけ一歩ずつ

たことは立派なことだし、Hさんの決意も伝わってきた。けれど、「何をやっていいかわからない…」起業への一歩を踏み出すために、何に興味があるのか、時間を忘れて夢中になることは何かを尋ねてみた。

「そうですねえ…。パンが大好きなんです。インターネットで取り寄せたりもします。それに、家でパンを焼くこともあって、友達にプレゼントすると喜んでくれるんで

すよ」。食感がモチリだとかフワフワだとかに加え、材料のこだわりや焼き加減のことなど、とても楽しそうに話した。「とっても詳しいですね」。本当にパンが好きなきなことが伝わってくる。何を隠そうパン好きな私も、Hさんにつられ、しばしパン談議に花を咲かせた。

「そうですねえ…。私、パンが大好きなんです。インターネットで取り寄せたりもします。それに、家でパンを焼くこともあって、友達にプレゼントすると喜んでくれるんで

話が一息ついたところで「こんな私でも、『パン』で起業できるでしょうか?」とHさん。和やかなムードに一瞬緊張が

走った。私をまっすぐに見つめるHさんに、「Hさんは、できると思いませんか?」と聞き返した。「できるような、できないような…よく分からないのかな、おいしいパン

を作るとは、すこく不安です」。そう答えるHさん。私は、何に不安を感じているのかを聞いてみた。Hさんは「ん」と首をかきあげ、考え込んだ。自分と真剣に向き合っているのだろう。そして、ポツリポツリと話し始めた。パンを売る場所のあてがないこと、多額の借金を背負うのではないかといいこと、そもそも買ってもらえるようなパンが作れるのかということ、など。

それらの不安を一つずつ解消するために、パンを提供するのにどんな方法なら可能か、借金をしないための限度額はいくらか、おいしいパンを訪れるときはききと」

た、モチモチ、フワフワの話になるんでしょね」と、二人で声を出して笑い合った。Hさんは既に、キラキラ輝く女性に見えた。

(福井新聞社提供)



イラスト・多田くにお